

中学校 分科会 D

授業者	井田 俊英	八尾市立龍華中学校
発表者	高森 景子	柏原市立堅下北中学校
司会者	満田 薫	東大阪市立英田北小学校
記録者	菅 みどり	東大阪市立加納小学校
助言者	田中 圭一	堺市立美原西小学校

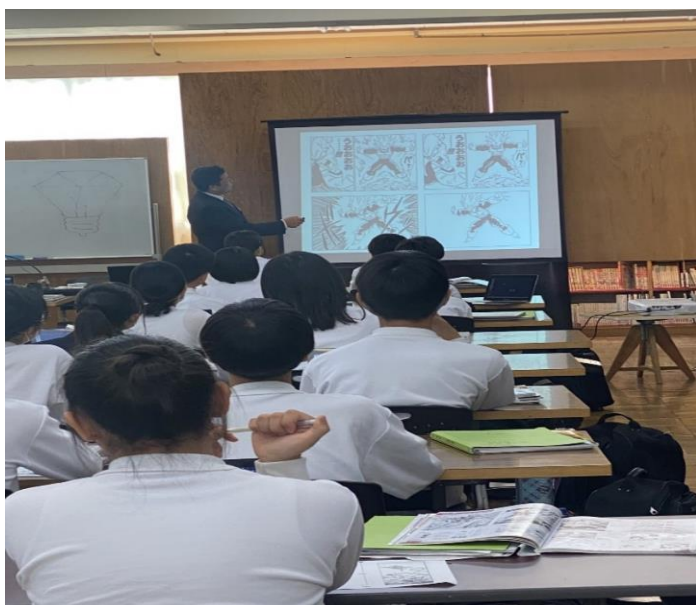
1、授業者より

「まんが表現

～コラージュでヒトコマつくってみよう～

新型コロナウイルスの影響もあり、進度がうまくいかないところもあったが、生徒から教えてもらいながら進めてきた。授業の中では、説明部分が長くなってしまったところがあったが、子どもたちは楽しく取り組むことができていると感じている。身近にある漫画表現で親しみやすく、わかりやすい。だからこそ、実際に表現を行うには高度な能力が必要になってくる。漫画に取り組むときに、1コマの中で高度なレベルが必要なので、素材をコラージュする方法やオノマトペを使いながら、取り組んできた。

ロイノートを活用し、資料箱に様々な材料となるものを入れ、生徒自身がうまく活用できるようにしてきた。他の教科で習ったことも、活用できている生徒もいた。誰もが、漫画表現ができることを体験し、その表現できる楽しさを実感させたいと考えている。



2、質疑応答

Q 漫画は、4コマで書かれているが、なぜ1コマで設定したのか。

また、どのように材料は集めてくるのか。

A まずは、1コマの中で、ICTを活用しながら漫画を描くことに取り組ませていった。ロイロノートの資料箱に、材料（データでの素材）を入れていったが、生徒自身や先生が描いたものをスキャンしてライブラリ化し、活用していく流れでデータでの素材を作っていた。

Q なぜ電球を題材にしたのか。

A 自分自身が、今まで竹熊健太郎さんの別冊宝島を読んだり、漫画を研究したりしていく中で、身の周りの生きものでないものに、命を吹き込むことをしていきたいという思いがあり、電球を題材に選んだ。



3、実践発表

「地域と連携した授業づくり」

柏原市に関係する内容を取り入れ、町について考える機会を作っている。もっと自分たちの町の魅力を知り、自ら感じ取ることで、卒業してからも町に愛着を持ち、過ごしてほしいと思っている。

柏原の子どもは人懐っこい。地域とつながることを目指し、取り組んできた。柏原では、1か月に1回、美術図工についての教材研究を行っている。学校正門にたどりつくまでに卒業記念壁画が飾られ、町を彩っている。その壁画で、毎年どのようなことが起こったかなどを振り返ることができるようになっている。漫画など、様々な題材で共同制作で取り組まれている。

柏原と言えば「ぶどう」というイメージが強い。柏原は、奈良県に隣接し、3分の2が山で、古墳の数も多い。大和川が有名で、自然豊かである。美術の授業を通して、感性を高め、

柏原市に、より愛着を高めてほしい。

「地域と連携した授業づくり」の実践として、『柏原に住む妖怪』（粘土制作）を取り組んだ。妖怪ウォッチのキャラクターを見て考える時間を取った。妖怪ウォッチのキャラクター「モレゾー」の初登場シーンをパワーポイントを使って提示した。出会う（導入）では、アイデアシートを使用し、自分の学校にはどんな妖怪がいるかを思いつくまま案を出す活動を行った。学校での出来事で、「いやなことがあったときには、妖怪の仕業かな。」や「いいことがあったのは、どんな妖怪のせいかな？」など、問いを投げかけながら進めていった。身の回りのもの（黒板消しや時計、スマートフォンなど）を題材に、発想豊かに考えていく様子があった。立体を意識して考えることを促し、アイデア段階から、班活動で発想を共有する時間を設けた。Gクレイで粘土とポスターカラーで、大きさも自由に作っていった。作品ができたら、妖怪に説明をつけた。自分のこだわりも表現し、鑑賞会を行った。説明には、妖怪の名前・年齢・大きさ・特徴・説明などを書かせるようにした。感想を伝え合う活動を行った。

4、質疑応答

Q 卒業制作の中で、共同制作をする上で大切にしていることについて。

A 最後だから、良いものを作ろうという話をする。皆が見るものだからという声かけをしていった。

Q 妖怪という題材を、なぜ中学校の中で設定したのか。

A わざと注目できる場をせまく設定するため。



5、指導助言

「まんが表現～コラージュでヒトコマつくってみよう～」の授業について、漫画の活用は良いことである。ただ、以前よりも、漫画を読まれなくなった。その理由として、コマ割りや文法が昔と違ってきていることが挙げられる。絵心について、漫画を小さいときに読んでいないということも影響している。読むことと描くことを連携させられていない。だから、漫画を活用していくのは、良いことである。

題材として、漫画を通してどのような力を育むのかを整理していく必要がある。美術の視点が必要である。

「地域と連携した授業づくり」について、地域連携の中心に美術があることがすばらしい。今後、美術がリーダーシップをとっていくことが望ましい。資源をどのように活用していくのかを考えていく必要があるだろう。ハード面では施設、ソフト面では文化や人が資源として挙げられるが、どのように活用していくか考えていかなければならない。

評価として、美術の能力と地域の位置付けを考える必要があるだろう。地域の人や保護者と共に進めていけるように連携していくことが大切である。